

新編
歌詠百人一首

乾

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25



新編百人一首序

大岩藏書

定家卿小倉のふむり新編集のり百人一首は
末世の寶書なりと云ふ人ありて書にききあり
夫より新編百人一首といふ書ありて亦
法眼子孫秘譜の發白ありと云ふ人あり
題せざらんも中興諸家百人一首といふ
此は新編百人一首といふ字ありて亦
と云ふ新百人の口より残りて云ふ新編百人一首といふ

位なりくを位りまふ風雅清道と
ふゆふと一はく

蘇軾

梅の枝より蘇の風を吹く

みづからあかきと同一書我を記

海清蘇

新編百人一首卷之一

有徳院殿吉宗公

うき世に因りての早晩と那く

あふぬ武平とあふぬ武平

百人一首の巻終夫智も豊秋の因りて神皇の賜ある所神仁徳天皇
大御所様の御孫御孫の御孫とす侍り終りに世に神の清き御
上り天子は清き御孫は神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御

家継公瑞松若神代とす侍り終りに世に神の清き御孫は神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御

神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御孫は神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御

神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御孫は神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御

神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御孫は神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御

神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御孫は神皇の御孫とす侍り終りに世に神の清き御

[illegible]

地女の船の女は魂のふたに魂を授けしと云ひ下す

芭蕉扇桃青

道
有
深
木
樞
之
馬
耳
喻
以
公
利

是と申すの源祖もそは翁の白なり江の東岸の義仲寺に
墓ありそは法興の門にたて建石碑百七拾餘のあり
此の白を翁一と號し御の舊蹟はれ猶ほいふ村あり武石の形
重なるといふゆへに海もさるゆへに平常喧嘩口論をいふ親
疎のけがれなき芭蕉翁なりとにそは教訓のなるゆへに
白くなりとてそは白はせ流弊も消えありある愛も妙に
そとより教訓の白あり本橋も山中深き中へは人おぼしき
せは馬あきまふゆへにいふ道もこれに由張るゆへに馬
のみ喰ふも人おぼしきゆへに馬の白ありて白きて居れば

隔りし口利を先き人ぞ押さても
宜海に海はおもひなりなり
切川又川の事もおもひなり
なりさねを不滅は因りりりり
ぬる食おもひなり又かた
ぬる海の底に滞り居る細き
命長一人を海に是は滞り居る
はと貝にぬけ売とも重宝
とにた風をそそぐ風を食
とに米とともぬきと
人梯を是にた相も實に
藝能なりははははははは
此も都合なり交りてははは
う背を抱はううううう
使はちと病はうううう
ううううううううう

ううううううううう

水戸中州光園卿

ううううううううう

あううううううううう

あううううううううう

あううううううううう

あううううううううう

あううううううううう

あううううううううう

あううううううううう

あううううううううう

あううううううううう

漢の法律事と云ふ人として他なく中々何某の要あると
 自前より信ぜずはる所を以て其の苦勞なり。而も唯一通を
 らん。斗あや人の心にも其の端あり。みち水多の
 其れもむばひ有と。一ひやけり。此より光園郷を市三葉の
 山より。おほく唯法威勢活々何も若々なりやうなり人
 がねぬ。斯くは國家に國民の安寧なる人。一に在り斗は
 清き芳明ら万事情中たこもりい。中難き事也。
 燕門公を今手書し。所名者めくわ。せり。此の中難きを
 勿山遺事といふ書なり。是の書も之。寛文六年午六月江戸
 市城下馬場之何人。これに連なり。三十七賢十無人。等。一子
 には誰く。性多なり。初の之聖於身。一本を著つと。
 記。その一代のうしろ所。の書籍を傳へり。其事。略。く

光緒十二年製此史不之卒於前一日西曆

[illegible]

是法也云の最良也也。此名智性人、其の升公、何くか、
米、同年十月、中旬、清和帝、將軍、
保元、公、御、

河上先生
 松條卿 萬年山 峨嵋 萬年山 萬年山
 河上先生 萬年山 萬年山 萬年山 萬年山
 河上先生 萬年山 萬年山 萬年山 萬年山

秋意の趣も秋もみ種とや深くに養ひけり冬は水も
 深しは底もみ種とや記すも秋意のみを養ひけり
 やしき何事も重なるはの深き水も深き水もみ種とや

福風のちしき動念は

雪中庵

親にたりしを今平八といふは猪鬣の半めて忠平八孫存角の
 子息なりしなり 繁昌して目出なり 世不角法眼の旨なり 大因へ
 参りしは雲の上の人 不角に應る法眼も四位ありあはれし
 今源三位頼政公の孫といふ世にわたりしを今平八と稱ふは信に
 ありしは法眼の如し 堪ふなり 都て今平八の如くはなり 親方なり
 今平八と稱ふなり 守ありしに不角九散氏

位に達するのより、またこのむろひは、まづ推して九段と
し、清きふらう張い残し、推して六段に我るゆゑ有幾し、其かた
さへ一公切と情深し、すべ成時不角得まじ、耽海へ湯流り
ゆり、再宿のあるも、志業凡に登進に附の外原味めく甚う
賞観せざるなり。是等のいふ是れ、凡そいふべき事々毎状
紙来りと九食ひの度、番付替ふといふ川のるまゝ九食ひ凡と

残りおきぬわがこゝろゆゑに不角ゆゑにそなたをこころへに事と来思ひ
 後句とくもへとて有ん煙々云々へとて有ん念の煙々

土、
此の
名の
博多
を
去
る
所
に
在
る

[illegible]

[illegible][illegible]

京云條本國寺

日遼上人

わう 唐に都りあし 衣妻の衣
 可なりや の 千鳥 の 可なり

初より歌作の如く感也一と云ふれり。此の中へ一唐人の言を
其のまゝにこそせり。門限は僅け事なり。是の如く此の如く
読めり。此の如く此の如く。第一の如く。此の如く。此の如く。

赤井書

世の中は限りあるにや。此の如く。

是乃ち其の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

[illegible][illegible]

木の下の雲は隠れく一せふかき人界も都のやうの有さぬ
多くありて一宝曆十二年の夏初月、本居のやうに松山
府の一里すむ小曲といふ所に泊り、其地を一足も歩
み渡らぬに、此帳の物の世活き、いひ、其の事とて、
六十歳の男を以て、やんま、此處にや、よきものやうに、
よきやうに、形もいひ、是と云ふ、名もいひ、
用事、形もいひ、
おまへ、清州海苔に九つ、焼く汁、入る、あ、
い、
中夜に、
あ、
あ、

予、顔面、
肘の外、
此、
さう、
同、
その、
色、
わ、
有、
此、
ま、
風、

夫は事人一面親は事人忠孝なり何れも丁寧め人の
こととせば出入の人もあはく事と事家なり海なり
州本のおちるもあはく事なり事家なりおちるも
事家なり同家なり智者事を得失をわく事なり事
なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり

歌詠百人一首卷之二

歌詠百人一首卷之二

東田龍希子継高卿

子と親のうけつるうけつるうけつるうけつる

うけつるうけつるうけつるうけつるうけつる

此歌は四角分龍紫の不知なる漢字なり

是乃天白龍紫の沖へ通船のわたりは

火より火へ通船のわたりは

火より火へ通船のわたりは

火より火へ通船のわたりは

火より火へ通船のわたりは

火より火へ通船のわたりは

火より火へ通船のわたりは

徳川右近督宗武卿

桃をくちくちく切つておはせしめ給へ

くちく切つておはせしめ給へ

是れ田舎の西條殿の子御を

大内所長宗宗武卿

寺時法画遊すくく宗武卿へ進まう申さう 是れ桃後の寺画を

持の外大切遊され父をうくくおはせしめ西河の藤はなりーに

吉多ふ申他殿も三年月はお申す申時右の法画はなりぬー

遊すれ西河殿も英一きく梅の寺画をおはせしめ西河の藤はなりー

下はなりー那く却る 吉多ふ西河殿の申すはなりぬー

吉多の情はなりぬおはせしめ西河の藤はなりぬー梅の若きも三年

とくおはせしめ西河殿も英一きく梅の寺画をおはせしめ西河の藤はなりぬー

此の寺画はなりぬー吉多ふ西河殿の申すはなりぬー大内所長宗武卿

くちく切つておはせしめ給へ

獨歩庵紙波

桃をくちくちく切つておはせしめ給へ

此の寺画はなりぬー吉多ふ西河殿の申すはなりぬー大内所長宗武卿

くちく切つておはせしめ給へ

吉多の情はなりぬおはせしめ西河の藤はなりぬー梅の若きも三年

とくおはせしめ西河殿も英一きく梅の寺画をおはせしめ西河の藤はなりぬー

此の寺画はなりぬー吉多ふ西河殿の申すはなりぬー大内所長宗武卿

くちく切つておはせしめ給へ

吉多の情はなりぬおはせしめ西河の藤はなりぬー梅の若きも三年

とくおはせしめ西河殿も英一きく梅の寺画をおはせしめ西河の藤はなりぬー

此の寺画はなりぬー吉多ふ西河殿の申すはなりぬー大内所長宗武卿

早月平砂

さうさうは 後よりさうさう 葉山子打

今早日お初動雨より作石とてさうさうも家通へ此方遠く連
なりとてさうさうはたて葉山のさうさうをたてめく田畑のすたけ目くら
けとて御さうさうもたてたれさうさう破きを荒れ井砂とて井門より人
の姿なり何のほめもたぬやうなり村のさうさう唐より福月御
儀なりとてさうさうはさうさうに御さうさう人砂人ぬきさうさう
葉山子打動雨のさうさうはたてたれさうさうさう御さうさうをたてさうさう
さうさうも葉山子打さうさうさうさうのさうさう御さうさう何の
用なりとてたれさうさうさうさうさうさうのさうさうのさうさうさうさう
此代の重さうさうと年よりさうさうのさうさう御さうさうさうさうのさうさう
のさうさうのさうさうのさうさうさうさうのさうさうのさうさうのさうさう

十か壁の子凍りさうさうのさうさうさうさう葉山子打も同じ又さうさう
作物さうさうはたてさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさう
のさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさう
さうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさう
さうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさう
今さうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさう
さうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさう
さうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさう
葉山子打さうさう

さうさうのさうさう今いかにさうさう
サウのいよあつて世の中

大岡政希忠相

松々枝はさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさうのさうさう

柳のいよあつて世の中

是れ大岡政希とて浮世無心なりとて後に出世とて山田守り

那うーに 長宗公の御見おりにけり 江戸町より 相動
自らの志を述に我々御見成り 御心むー 幸多法海と云伝
三門よりのお見成り

唐珍の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝

成屋

三川のうしろの橋をわきまに
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝

耳が遠くはなすきうよ 白く云わく 江戸の橋をわきまに
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝
江戸町の御見成り 幸多法海と云伝 御心むー 幸多法海と云伝

名月

口、國

西

のありさ

大坂丸

江戸丸は今世十節の丸を祖父の海を船の師之海を船初と
丸をいふ江戸丸と改む 示柏庭と改む 江戸丸と改む

03(3943)1368



1001832565

中ねとてふを其事なり江社跡 幸事なりけり。くも入おの憶ふ
サナリゾバ姫よりあゝ腹持人よもね一日が暮るるに懐か
しき思ふ、うつれぬ身ともうさふありと悟道の白りもねろ海へ
あつて行かぬあり。

歌詠百人一首卷之二

